はじめに

本巻「マンダラと密教遺跡」には十二編の論考がおさめられているが、これらは内容から大きく次の四つのテーマに分類することができる。

㈠マンダラ一般
㈡金剛界マンダラ
㈢ラダックのチベット寺院
㈣パキスタンとバングラデシュの密教美術

このうち、マンダラ一般に関する論考は「マンダラの宇宙観」「マンダラの形成と展開」のほかにも、「ラダックのマンダラ」の中に第五節「宇宙と人間」として含まれ、本巻全体の基調となっている。金剛界マンダラをあつかった「金剛界マンダラについて」「金剛界の微細会と供養会について」は、第三のテーマであるラダックのチベット寺院とも密接な関係にある。アルチ寺をはじめとするラダックの仏教寺院は、金剛界マンダラに代表されるヨーガ・タントラのマンダラの宝庫なのである。また「四金剛女と四明妃」はマンダラの中の女尊のグループを取り上げた論文であるが、四金剛女は金剛界マンダラに含まれ、ラダックのマンダラに対する言及も論文中にある。一方の四明妃は松長博士の重要な研究対象である『秘密集会タントラ』に説かれるマンダラに登場する。第四のテーマに関してはそれぞれ一編ずつの論文がおさめられている。最後の二編はチベットと日本の密教美術をあつかった啓蒙的な論文である。

一部の論文は発表されてからすでに時間が経過し、その後の研究の進展が見られるものもある。各テーマごとに、

関連領域の研究にも配慮しながら、これらの研究成果を管見のおよぶ範囲で紹介しよう。

マンダラ一般

マンダラが伝統的な真言教学から離れ、一般の人々にもわかりやすく語られるようになったのはそれほど昔のことではない。マンダラが密教や空海などとともに一種のブームをひきおこしたのは一九八〇年代に入ってからであるが、松長博士の著作『密教・コスモスとマンダラ』（一九八五）や『密教』（一九九一）などもその大きな原動力となった。

啓蒙的な立場からマンダラに関する著作を発表してきた研究者として立川武蔵氏や頼富本宏氏があげられる。このうち、立川氏の著作としては『ヒマラヤの僧院』所収の論文（石黒他　一九八一）やヘールカをあつかったもの（一九七七）が密教美術に関する比較的初期の論文であるが、その後『曼荼羅の神々』（一九八七ａ）としてネパールの仏教美術を中心にまとまった形で発表された。同時期に書かれた「マンダラー構造と機能ー」（一九八九）も、マンダラにテーマをしぼって、その形態の持つシンボリズムやインド思想史における位置づけを試みている。一般向けの『はじめてのインド哲学』（一九九二）にはインドの密教に一章がさかれているが、マンダラに関する言及も多い。最近ではよりビジュアルな『マンダラ』（一九九六）も発表された。

ラダックやインドのオリッサ地方の現地調査で大きな実績を上げ、伝統的な日本の密教美術にもくわしい頼富本宏氏は、わが国における密教図像学の分野の第一人者である。大著『密教仏の研究』（一九九〇ａ）は氏の学位論文がベースになっているが、マンダラに含まれる尊格研究として重要な研究である。一般向けには『マンダラの仏たち』（一九八五）、『密教とマンダラ』（一九九〇ｂ）、『曼荼羅の鑑賞基礎知識』（一九九一）などマンダラに関する多くの

著作がある。

気鋭の仏教学者田中公明氏は、この十年たらずのあいだにマンダラや密教についての著作を矢継ぎ早に出版している。第一作の『曼荼羅イコノロジー』（一九八七b）はインド、チベット、日本のマンダラを網羅的に解説した労作で、一般の人から研究者まで幅広い層の読者に受け入れられた。『詳解河口慧海コレクション』（一九九〇）では、有名な入蔵者河口慧海が将来した美術品の解説を行っているが、チベットの密教美術の概説書ともなっている。『チベット密教』（一九九三）にはマンダラに関する記述は必ずしも多くはないが、チベット仏教の入門書としての役割を持つ。最近では『時輪タントラ』をあつかった『超密教時輪タントラ』（一九九四）や、密教図像関連の論文を集めた『インド・チベット曼荼羅の研究』（一九九六）を発表するなど、その勢いはおとろえることがない。学術論文の数も多い。

マンダラに関する現代的解釈には、おそらくイタリアの東洋学者ジュゼッペ・トゥッチの『マンダラの理論と実践』が果たした役割が大きい。発表されてからすでに半世紀近く経過しているが、マンダラに関する斬新な見方は現在でもその光を失っていない。一九八四年にようやく邦訳が入手しやすい形で出版された。また多数の図版と周到な訳注をくわえた別訳も一九九一年に発表されている。

マンダラに関する専門的な研究は、仏教学における精緻な研究と平行して、従来の学問分野を超えた学際的な方向へと進みつつある。心理学者のユングが早くからマンダラに着目していたことは有名である。心理学の他にも文化人類学、宗教学、美術史、建築学、都市論などの分野の研究者がマンダラに関心を向け始めている。このうち、美術史の領域では仏教絵画の研究の一分野として、わが国のマンダラの研究がすでに確立しているが、インドやチベット、中央アジアの仏教美術の研究者たちもマンダラに着目している（たとえば Ricca & Lo Bue 1993, Giés 1994, Giés

& Cohen 1995, 立川編　一九九三)。この背景にはラダックやギャンツェ、ラサなどのチベットの重要な寺院のマンダラや、敦煌をはじめとする中央アジアの遺跡から出土したマンダラの存在が知られるようになったことが大きい。また、より広い領域の研究者による試行的な論文集も近年刊行された(立川編　一九九六)。

マンダラに関するインドの代表的な文献は、本巻の中でも何度か言及される『ニシュパンナヨーガーヴァリー』(Niṣpannayogāvalī)である。サンスクリット・テキストは Bhattacharyya (1949) によってはやくから発表されていたが、最近になって、文献全体や個々のマンダラに関する研究がいくつか発表された。おもなものとして長野・立川編(一九八九)、Bühnemann & Tachikawa (1991)、立川(一九九三、一九九五)、森(一九九二、一九九四、一九九六b、一九九六c)があげられる。

金剛界マンダラ

金剛界マンダラは、わが国では胎蔵(界)マンダラとともにいわゆる両部曼荼羅(両界曼荼羅)を構成し、真言宗においてもっとも重要視されるマンダラである。インドやチベットの密教の中でも、ヨーガ・タントラの代表的なマンダラであるばかりではなく、その後の無上ヨーガ・タントラのほとんどのマンダラに影響を与えた。わが国の金剛界曼荼羅の研究は、おもに日本美術の研究者たちによってこれまで進められてきた。神護寺につたわる高雄曼荼羅とその流れをくむ現図系の曼荼羅、おもに天台宗に伝えられた八十一尊曼荼羅、園城寺所蔵の五部心観、従来から伝真言院曼荼羅の名で知られ、現在では西院曼荼羅と呼ばれることの多い両部の曼荼羅などがその代表的な遺例であろう。石田尚豊氏の大著(一九七五)をはじめ、これらのマンダラをあつかった著作や論文は数多くある。

これに対し、インドやチベットの金剛界マンダラに関する研究は意外なほど少ない。最近になってようやく乾仁志氏が、典拠となる『真実摂経』(『初会の金剛頂経』)を中心にマンダラに関する記述の整理と分析を始めた(一九九五、一九九六c)。この中で乾氏は四大品に含まれる六種ずつ(降三世品は十種)のマンダラのひとつひとつを取り上げている。また、二十八種のマンダラの全体像を示した論文(一九九六b)や、金剛界系の儀軌である『クリヤーサングラハ』(Kriyāsaṃgraha)に含まれる金剛界マンダラについての論考も発表している。大正大学の総合仏教研究所からはアーナンダガルバによる金剛界マンダラ儀軌『一切金剛出現』(Sarvavajrodaya)のテキストと翻訳が出版された(密教聖典研究会 一九八六、一九八七)。このときの研究会のメンバーの一人であった森口光俊氏は、同じ文献の賢劫千仏の部分のテキストを個別に発表している(一九八九)。先述の『ニシュパンナヨーガーヴァリー』に含まれる金剛界マンダラについては立川氏が校訂テキストと翻訳を行っている(一九九五)。金剛界マンダラのいわゆる成身会三十七尊の周囲に描かれる賢劫十六尊については筆者が論考を発表した(一九九三)。田中公明氏は金剛界マンダラの個々の尊格の成立をあつかった一連の論文を発表している(一九八一など)。田中氏はチベットに見られる金剛界マンダラについても、ギャンツェのペンコルチューデ仏塔とグゲのツァパラン遺跡の遺例について報告を行っている(一九八七a、一九八九、一九九二、いずれも一九九六に再録)。このうちペンコルの仏塔の第五層に見られる『真実摂経』所説のマンダラ群については、『真実摂経』とアーナンダガルバの注釈書『タットヴァーローカカリー』(Tattvālokakarī)を参照した網羅的な報告が、筆者によって発表された(一九九七b)。

ラダックのチベット寺院

ラダックに関する文献一般に関してはBray（1988）が詳細な文献目録を発表している。必ずしも掲載されている文献すべてがラダックに直接関係するわけではなく、また邦文の文献には遺漏もあるが、まとまった形で手にすることができ、便利である。ラダックのチベット寺院については、さまざまな写真集がこれまで発表されている。代表的なものに『ヒマラヤの僧院』（石黒他　一九八一）、『マンダラ蓮華』（加藤他　一九八五）、『ヒマラヤ仏教王国』（田村他　一九八六）、『ラダック曼荼羅』（岩宮他　一九八七）などがあげられる。海外での出版も盛んで、Snellgrove & Skorupski (1977, 1980)、Pal（1982）、Goepper（1996）などがある。学術的な研究としては、種智院大学が行った現地調査の成果が『チベット密教の研究』として刊行されている（種智院大学インド・チベット研究会　一九八二）。

ラダック一般についてはCrook & Osmaston eds.（1994）がくわしい。気候、風土、生態、歴史、社会、僧院の実態などに関して紹介している。同書によればラダック学の国際学会（The International Association for Ladack Studies）も設立されているらしい。ラダックの歴史に関してはNaudou（1980）が以前からあったが、邦文のものとしては矢崎（一九九三）が入手しやすい。ただし内容はかなり専門的である。

西チベットの重要な仏教遺跡としては、ラダック地方の他にグゲ地方やスピティ地方が重要である。このうち、グゲのツァパラン遺跡については、トゥッチの報告（Tucci 1932-41）が長く利用されてきたが、近年では田中公明氏（一九九六）やヘンス（Henss 1996）らによって現地調査が実施され、またWeyer & Aschoff（1987）による写真

集も刊行されている。スピティ地方の仏教寺院は、高野山大学チベット仏教文化調査団が一九八二年に世界にさきがけて現地に入り、寺院内の写真撮影に成功した。その成果は『第四回高野山大学チベット仏教文化調査団報告書』（一九八三）として刊行されているほか、氏家氏の論文もある（一九八六）。その後、成田山仏教研究所の調査隊による報告書も出版された（一九八七）。また、最近ではウィーン大学のシュタインケルナー氏を中心にヨーロッパの仏教学者たちによるタボ寺の総合的な調査が実施され、寺院構造、壁画、写本、銘文などについて多くの研究成果が公表されつつある。とくにタボ寺のチベット語写本については、わが国の仏教学者もこのプロジェクトに参加している。

グゲ地方とラダック地方のほぼ中間に位置するピヤンとトンガと呼ばれる地に、大規模な石窟寺院があらたに発見されたのは一九九二年のことである。これは中国の四川連合大学のチベット調査隊によるものであるが、石窟内の主要な壁画を集成した写真集がわが国から刊行された（中国・四川連合大学　一九九七）。編年や様式、壁画の内容などに関する実質的な研究は端緒についたばかりである。

チベットのマンダラに関する研究もここ数年で飛躍的に進んだ。とくにサキャ派のゴル寺に伝わった一三九種のマンダラ集の刊行は、その重要な契機となった（bSod nams rGya mtsho 1983）。その後、簡略なエディションがユネスコ東アジア文化研究センターからも刊行され、入手しやすくなった（bSod nams rGya mtsho & Tachikawa 1989, 1991）。個々のマンダラに関してもBrauen（1992）のように時輪マンダラに関する総合的な研究書も現れている。また、チベットの絵画史という視点からは、Jackson（1996）も重要である。

パキスタンとバングラデシュの密教美術

パキスタンの仏教美術については、ガンダーラ美術に関しては膨大な研究があるが、密教美術に関しては皆無といってよい。本文中にも言及のあるカラコルム・ハイウェイの線刻についてはDani（1987）がくわしい。ただし、密教美術としてはとらえられていない（宮治　一九九六）。

バングラデシュの密教美術は、古くはBhattasali（1929）、Banerji（1981）による研究があったが、現在ではHuntingtonによる*The "Pala-Sena" Schools of Sculpture*（1984）がインドのベンガル、ビハール地方を含むパーラ王朝の密教美術研究の基本的文献となっている。その後発表されたHuntingon, S. & J. Huntington（1990）には、チベット、ネパール、東南アジアの作品も含まれるが、この地域の仏教美術のすぐれた入門書となっている。松長博士が主催した高野山大学密教文化研究所のバングラデシュ調査隊の他のメンバーによる調査報告は、同研究所の紀要第六、七号に掲載されている（東　一九九四、越智　一九九四、乾　一九九三、藤田　一九九三、松長　一九九三）。バングラデシュの仏教美術に関するまとまった文献としては、本巻にも言及されているAlam（1985）をあげることができる。ダッカの国立博物館から刊行されている論文集（*Bangladesh Lalit Kalā: Journal of the Dacca Museum*）にも関連文献が多数含まれている。カルカッタのアジア協会（Asiatic Society）から出版されているSaraswatiの*Tantrayāna Art: An Album*（1977）にもバングラデシュ出土のかなりの数の作例が紹介されている。

パーラ王朝の仏教美術一般に関しては、わが国では宮治昭氏を中心とするグループが、主要な作品のデータを整理し、図像学的特徴の確定を進めている。その成果は宮治（一九九三、一九九五）、森雅秀（一九九〇、一九九六a）、

森喜子（一九九〇－一九九三）、佐久間（一九九一－一九九二）、佐久間・宮治（一九九三）として公表されている。海外ではHuntingtonのほかにBautze-Picronがパーラ王朝の仏教美術について、最近、精力的に研究を行っている（1985 a etc., Picron 1978 etc.）。このほかBhattacharya (1980, 1985), La Plante (1964), Leoshko (1985 etc.), Weiner (1962)などの論文もあげられる。

パーラ王朝とならんで、インドで密教が栄えたもう一つの地域であるオリッサに関しては、佐和隆研氏を代表とする調査隊が大きな成果を上げた。調査報告は佐和編（一九八二）として発表されている。頼富氏はその後の成果も合わせて先述の『密教仏の研究』（一九九〇a）としてまとめ、また仏像図典という一般の読者にも利用しやすい形でも提供した（頼富・下泉　一九九四）。

文献

東智學　一九九四「バングラデシュ・マイナマティ遺跡群の歴史的背景」『高野山大学密教文化研究所紀要』七、一六五－一八二頁。

石黒淳・八田幸雄・立川武蔵　一九八一『ヒマラヤの僧院』講談社。

石田尚豊　一九七五『曼荼羅の研究』東京美術。

石田尚豊　一九八四『曼荼羅の見方－パターン認識』岩波書店。

乾仁志　一九九三「バングラデシュの密教遺跡　特に塔を中心として」『高野山大学密教文化研究所紀要』六、一六六－一九八頁。

乾仁志　一九九五「『初会金剛頂経』所説のマンダラについて（前）」『高野山大学密教文化研究所紀要』九、一－二六頁。

乾仁志　一九九六a「Kriyāsamgraha所説の金剛界曼荼羅」『印度学仏教学研究』四四－一、一四九－一五三頁（横組）。

乾仁志　一九九六b「『初会金剛頂経』の四大品とマンダラの特色」『高野山大学創立百十周年記念　高野山大学論文集』高野山大学、九五－一一四頁。

乾仁志　一九九六c「『初会金剛頂経』所説のマンダラについて（後）」『高野山大学密教文化研究所紀要』一〇、一―二八頁（横組）。
岩宮武二（写真）、石黒淳・頼富本宏（解説）　一九八七『ラダック曼荼羅』岩波書店。
氏家覚勝　一九八六「タボ寺の尊像美術―毘盧遮那像と阿弥陀像を中心として」『密教図像』二、一―一四頁。
越智淳仁　一九九四「ラーマパーラ王のジャガッダラ寺」『高野山大学密教文化研究所紀要』七、一四三―一六四頁。
加藤敬・小林暢善　一九八五『マンダラ蓮華』平河出版社。
佐久間留理子　一九九一、一九九二「パーラ朝における観自在菩薩の図像的特徴(1)(2)」『名古屋大学古川総合研究資料館報告』七、一〇九―一四八頁。同八、九五―一一〇頁。
佐久間留理子・宮治昭　一九九三「パーラ朝における観自在菩薩の図像的特徴(3)」『名古屋大学古川総合研究資料館報告』九、一〇七―一二九頁。
佐和隆研編　一九八二『密教美術の原像』法藏館。
種智院大学インド・チベット研究会編　一九八二『チベット密教の研究』永田文昌堂。
立川武蔵　一九七七「密教へのアプローチ（インド学的アプローチ―シヴァとヘールカ）」宮坂宥勝・梅原猛・金岡秀友編『講座密教4　密教の文化』春秋社、二六〇―二八一頁。
立川武蔵　一九八六「金剛ターラーの観想法」『論叢仏教美術史』（町田甲一先生古稀記念会編）吉川弘文館、六五―九七頁。
立川武蔵　一九八七a『曼荼羅の神々』ありな書房。
立川武蔵　一九八七b「仏教図像」長野泰彦・立川武蔵編『チベットの言語と文化』冬樹社、三三六―三六三頁。
立川武蔵　一九八七c「金剛界マンダラ資料」『ニヤグローダ』仏教思想研究会四、一―六三頁。
立川武蔵　一九八九「マンダラ―構造と機能―」『岩波講座東洋思想　第一〇巻　インド仏教　三』岩波書店、二八九―三一四頁。
立川武蔵　一九九一「生命体としての宇宙」『日本仏教学会年報』五六、二一三―二二七頁。
立川武蔵　一九九二『はじめてのインド哲学』（講談社現代新書）講談社。
立川武蔵　一九九三「『完成せるヨーガの環』第19章「金剛界マンダラ」和訳」宮治昭（代表）『インドのパーラ朝美術の図像

学的研究』（平成三・四年度科学研究費補助金研究成果報告書）、i－xiii頁。
立川武蔵　一九九五「『完成せるヨーガの環』第19章「金剛界マンダラ」訳註」『密教図像』一四、一－三三頁。
立川武蔵　一九九六『マンダラ』学習研究社。
立川武蔵編　一九九一『講座　仏教の受容と変容3　チベット・ネパール編』佼成出版社。
立川武蔵編　一九九三『曼荼羅と輪廻－その思想と美術』佼成出版社。
立川武蔵編　一九九六『マンダラ宇宙論』法藏館。
田中公明　一九八一「金剛界曼荼羅の成立について（一）」『印度学仏教学研究』三〇－一、一三四－一三五頁。
田中公明　一九八三「金剛界曼荼羅の成立について（三）」『印度学仏教学研究』三一－二、六一五－六一六頁。
田中公明　一九八七a「ペンコルチューデ寺院の金剛界曼荼羅－G. Tucci 博士の報告と現況を比較して」『東京大学文学部文化交流研究施設紀要』八、八一－一〇一頁。
田中公明　一九八七b『曼荼羅イコノロジー』平河出版社。
田中公明　一九八九「ペンコルチューデ仏塔と『初会金剛頂経』所説の28種曼荼羅」『密教図像』六、一－一三頁。
田中公明　一九九〇『詳解河口慧海コレクション　チベット・ネパール仏教美術』佼成出版社。
田中公明　一九九二「西チベット・トリン寺とツァパラン遺跡の金剛界諸尊壁画について」『密教図像』一一、一一－二二頁。
田中公明　一九九三『チベット密教』春秋社。
田中公明　一九九四『超密教時輪タントラ』東方出版。
田中公明　一九九六『インド・チベット曼荼羅の研究』法藏館。
田村仁（撮影）、今枝由郎・立川武蔵・真鍋俊照・頼富本宏（解説）一九八六『ヒマラヤ仏教王国』三省堂。
チベット仏教文化研究会　一九八三『第四回高野山大学チベット仏教文化調査団報告書』高野山大学。
中国・四川連合大学　一九九七『西西蔵石窟遺跡』（頼富本宏監修）集英社。
東京国立博物館編　一九九六『シルクロード大美術展』（図録）読売新聞社。
トゥッチ、ジュゼッペ　一九八四『マンダラの理論と実践』ロルフ・ギーブル訳　平河出版社。
トゥッチ、ジュゼッペ　一九九一『マンダラの理論と実際』金岡秀友・秋山余思訳　金花舎。

長野泰彦・立川武蔵編　一九八九『国立民族学博物館研究報告別冊　第七号　法界語自在マンダラの神々』国立民族学博物館。
藤田光寛　一九九三「パーラ王朝の諸王が建立した四大仏教寺院」『高野山大学密教文化研究所紀要』六、二〇〇－二一六頁。
松長恵史　一九九三「光背五仏について」『高野山大学密教文化研究所紀要』六、一四五－一六二頁。
松長有慶　一九八五『密教・コスモスとマンダラ』日本放送出版協会。
松長有慶　一九九一『密教』（岩波新書）岩波書店。
密教聖典研究会　一九八六「Vajradhātumahāmaṇḍalopāyikā-Sarvavajrodaya－梵文テキストと和訳(I)」『大正大学総合仏教研究所年報』八、二四－五七頁。
密教聖典研究会　一九八七　「Vajrodhātumahāmaṇḍalopāyikā-Sarvavajrodaya－梵文テキストと和訳(II)完」『大正大学総合仏教研究所年報』九、一三－八五頁。
宮治昭(代表)　一九九三『インドのパーラ朝美術の図像学的研究』（平成三・四年度科学研究費補助金研究成果報告書）。
宮治昭　一九九五「インドの大日如来の現存作例について」『密教図像』一四、一－三〇頁。
宮治昭　一九九六『ガンダーラ　仏の不思議』講談社。
森雅秀　一九九〇「パーラ朝の守護尊・護法尊・財宝神の図像的特徴」『名古屋大学古川総合研究資料館報告』六、六九－一一一頁。
森雅秀　一九九二「観想上のマンダラと儀礼のためのマンダラ」『日本仏教学会年報』五七、七三－九〇頁。
森雅秀　一九九三「賢劫十六尊の構成と表現」『宮坂宥勝博士古稀記念論文集インド学密教学研究』法藏館、九〇九－九三七頁。
森雅秀　一九九四「『完成せるヨーガの環』第1章「文殊金剛マンダラ」訳およびテキスト」『高野山大学密教文化研究所紀要』七、一一三－一四二頁。
森雅秀　一九九六a「パーラ朝の文殊の図像学的特徴」『高野山大学論叢』三一、五五－九八頁（横組）。
森雅秀　一九九六b「『完成せるヨーガの環』の成立に関する一考察」『密教図像』一五、二八－四二頁。
森雅秀　一九九六c「『完成せるヨーガの環』第11章「ヴァジュラフーンカーラ・マンダラ」訳およびテキスト」『高野山大学創立百十周年記念　高野山大学論文集』一〇一－一二四頁。

森雅秀　一九九七a「オリッサ州立博物館の密教美術」『高野山大学密教文化研究所紀要』一〇、二九－七〇頁（横組）。
森雅秀　一九九七b「ペンコルチューデ仏塔第5層の『金剛頂経』所説のマンダラ」『チベット仏教図像研究（国立民族学博物館研究報告別冊　第一八号）』（立川武蔵・正木晃編）、二六九－三一八頁。
森喜子　一九九〇－一九九二「パーラ朝の女尊の図像的特徴(1)～(3)」『名古屋大学古川総合研究資料館報告』六、一一三－一五五頁。同七、一五五－一九二頁。同八、六九－一一四頁。
森喜子　一九九三「パーラ朝のターラーに関する図像的考察－三尊形式を中心として」『宮坂宥勝博士古稀記念論文集インド学密教学研究』法藏館、八二七－八四八頁。
森口光俊　一九八九「Vajradhātumahāmaṇḍalopāyika Sarvavajrodaya 梵文テキスト補欠－新出写本・蔵・梵・漢対照　賢劫千仏名を中心として」『智山学報』三八、一－三七頁。
矢崎正見　一九九三『ラダックにおけるチベット仏教の展開』大東出版社。
頼富本宏　一九八五『マンダラの仏たち』東京美術。
頼富本宏　一九八八『密教』講談社。
頼富本宏　一九九〇a『密教仏の研究』法藏館。
頼富本宏　一九九〇b『密教とマンダラ』日本放送出版協会。
頼富本宏　一九九一『曼荼羅の鑑賞基礎知識』至文堂。
頼富本宏・下泉全暁　一九九四『密教仏像図典　インドと日本のほとけたち』人文書院。

Alam, A. K. M. Shamsul 1985 *Sculptural Art of Bangladesh : Pre-Muslim Period.* Dhaka : Department of Archaeology and Museums.
Asher, F. M. 1970 The Former Broadly Collection, Bihar Sharif. *Artibus Asiae* 32 (2/3) : 105-124.
Asher, F. M. 1975 Vikramaśīla Mahāvihāra. *Bangladesh Lalit Kala* 1 (2) : 107-113.
Asher, F. M. 1980 *The Art of Eastern India,* 300-800. Delhi : Oxford University Press.
Asher, F. M. 1981-3 The Effect of Pāla Rule : A Transition in Art. *Journal of the Indian Society of Oriental Art.* 12/13 : 1-7.

Asher, F. M. 1986 Sculptures from Rajaona, Valgudar and Jaynagar : Evidence for an Urban Center. *East and West* 36 (1-3) : 227-247.

Asher, F. M. 1988 Sculptures of Indapaigarh. *Arts Asiatiques, Annales du musée Guimet et du musée Cernuschi.* 43 : 13-18.

Banerji, R. D. 1981 (1933) *Eastern Indian School of Mediaeval Sculpture.* New Delhi : Ramanand Vidya Bhawan.

Bautze-Picron, C. 1985 a La statuaire du Sud-East du Bangladesh du Xe au XIIe siècle. *Arts Asiatiques* 40 : 18-31.

Bautze-Picron, C. 1985 b Représentation du/des Débot(s) dans la statuaire Bouddhique en pierre du Bihar a l'époque "Pāla-sena". *Berliner Indologische Studien* 1 : 123-135.

Bautze-Picron, C. 1986 The 'Stele' in Bihar and Bengal, 8th to 12th c. : Structure and Motifs. *Berliner Indologische Studien* 2 : 107-131.

Bautze-Picron, C. 1988 The Lost (?) Pedestal from Madanapāla's Reign, Year 14. *South Asian Studies* 4 : 75-81.

Bautze-Picron, C. 1989 "Identification" or "Classification" in Buddhist Iconography : The Case of the Six-handed Avalokiteśvara Images in Bihar and Bengal, 8th to 12th Century. In A. L. Dallapiccola (ed.), *Shastric Traditions in Indian Arts*, Stuttgart, Steiner Verlag Wiesbaden, pp. 35-50.

Bautze-Picron, C. 1990 a The Nimbus in India upto the Gupta Period. *Silk Road Art and Archaeology* 1 : 81-97.

Bautze-Picron, C. 1990 b Bhairava et les Méres au Bengale septentrional. *Arts Asiatiques* 45 : 61-66.

Bautze-Picron, C. 1991/1992 Lakhi Sarai, An Indian Site of Late Buddhist Iconography, and Its Position within the Asian Buddhist World. *Silk Road Art and Archaeology* 2 : 239-273.

Bautze-Picron. C. 1992 a The 'Stele' in Bihar and Bengal, 8th to 12th Centuries Symmetry and Composition. In E. M. Raven & K. R. van Kooij eds., *Indian Art and Archaeology*, Leiden : Brill, pp. 3-34.

Bautze-Picron, C. 1992 b A Preliminary Report on the Buddha Image from Betagi. In C. Jarrige ed. *South Asian Archaeology 1989.* Paris, pp. 301-308.

Bautze-Picron, C. 1995 Between Men and Gods : Small Motifs in the Buddhist Art of Eastern India, and Interpretation. In K. R. van Kooij & H. van der Veere eds. *Function and Meaning in Buddhist Art : Proceedings of a Seminar Held at Leiden*

University 21—24 October 1991, Groningen, Egvert Forsten, pp. 59-79.

Bhattacharya, G. 1980 Stūpa as Maitreya's Emblem. In A. L. Dallapiccola (ed.), *The Stūpa, Its Relitious Historical and Architectural Significance*, Wiesbaden, pp. 100-111.

Bhattacharya, G. 1985 Two Interesting Items of the Pāla Period. *Berliner Indologische Studien* 1 : 135-147.

Bhattasali, N. K. 1929 *Iconography of Buddhist and Brahmanical Sculptures in the Dacca Museum.* Dacca : Dacca Museum Committee.

Brauen, M. 1992 *Das Mandala : Der Heilige Kreis im Tantrischen Buddhismus.* Köln : Du Mont Buchverlag Köln.

Bray, J. 1988 *A Bibliography of Ladakh.* Warminster : Aris & Phillips.

bSod nams rGya mtsho 1983 *The Tibetan Maṇḍalas, the Ngor Collection.* Tokyo : Kodansha.

bSod nams rGya mtsho & M.Tachikawa 1989 *The Ngor Mandalas of Tibet.* Bibliotheca Codicum Asiaticorum 2. Tokyo : The Centre for East Asian Cultural Studies.

bSod nams rGya mtsho & M. Tachikawa 1991 *The Ngor Mandalas of Tibet : Listings of the Mandala Deities.* Bibliotheca Codicum Asiaticorum 4. Tokyo : The Centre for East Asian Cultural Studies.

Bühnemann, G. & M. Tachikawa 1991 *Niṣpannayogāvalī Two Sanskrit Manuscripts from Nepal.* Bibliotheca Codicum Asiaticorum 5. Tokyo : The Centre for East Asian Cultural Studies.

Crook, J. & H. Osmaston 1994 *Himalayan Buddhist Villages : Environment, Resources, Society and Religious Life in Zangskar, Ladakh.* Delhi : Motilal Banarsidass.

Dani, A. H. 1987 Origin of the Buddha Image : The Chilas Evidence. *Journal of Central Asia* 10 (2).

Giés, J. 1994 *Les arts de l'Asie centrale : La collection Paul Peliot du musée national des arts asiatiques-Guimet*, 2 vols. Paris : Réunion des Musées Nationaux.

Giés, J. & M. Cohen 1995 *Sérinde, Terre de Bouddha : dix siécles d'art sur la Route de la Soie.* Paris. Réunion des Musées Nationaux.

Goepper, R. 1996 *Alchi : Ladakh's Hidden Buddhist Sanctuary.* London : Serindia.

Henss, M. 1996 Wall-Paintings in Western Tibet : The Art of the Ancient Kingdom of Guge, 1000-1500. In *On the Path to Void : Buddhist Art of the Tibetan Realm*, ed. by P. Pal. Mumbai : Marg Publications, pp. 196-225.

Huntington, S. L. 1984 *The "Pala-Sena" Schools of Sculpture.* Studies in South Asian Culture vol. X. Leiden : E. J. Brill.

Huntington, S. L. & J. C. Huntington 1990 *Leaves from the Bodhi Tree : The Art of Pala India (8th-12th centuries) and Its International Legacy.* Seattle : The Dayton Art Institute.

Jackson, D. 1996 *A History of Tibetan Painting.* Wien : Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.

La Plante, John D. 1964 A Pre-Pāla Sculpture and Its Significance for the International Bodhisattva Style in Asia. *Artibus Asiae* 26 (3-4) : 247-284, 290-292.

Leoshko, J. 1985 The Appearance of Amoghapāśa in Pāla Period Art, In A. K. Narain ed. *Studies in Buddhist Art of South Asia*, New Delhi, pp. 127-135.

Leoshko, J. 1988 a The Case of the Two Witnesses to the Buddha's Enlightenment. *Mārg* 39 (4) : 39-52.

Leoshko, J. 1988 b The Vajrasana Buddha. *Mārg* 40 (1) : 29-44.

Leoshko, J. 1993/4 Scenes of the Buddha's Life in Pāla-Period Art. *Silk Road Art and Archaeology* 3 : 251-275.

Leoshko, J. 1995 Pilgrimage and the Evidence of Bodhgaya's Images. In K. R. van Kooij & H. van der Veere eds. *Function and Meaning in Buddhist Art : Proceedings of a Seminar Held at Leiden University 21-24 October 1991*, Groningen, Egvert Forsten, pp. 45-57.

Naudou, J. 1980 *Buddhists of Kaśmīr.* Delhi : Agam Kala Prakashan.

Pal, Pratapaditya 1982 *A Buddhist Paradise : The Murals of Alchi.* Basle : Ravi Kumar for Visual Dharma Publicaions.

Picron, C. 1978 Gopāla II ou Gopāla III Xe ou XIIe siècle. Datation d'une image de Śiva. *Arts Asiatiques* 34 : 105-120.

Picron, C. 1980 De Rambhā á Lalitā Devī, la Devī dans la Statuaire Pāla-Sena en Pierre. *Artibus Asiae* 42 (2) : 282-301.

Picron, C. 1984 Brahmā in Pāla-Sena Stone Sculpture. *Oriental Art* 30 (1) : 93-99.

Ricca, F. & E. Lo Bue 1993 *The Great Stupa of Gyantse : A Complete Tibetan Pantheon of the Fifteenth Century.* London : Serindia.

Saraswati, S. K. 1977 *Tantrayāna Art: An Album.* Calcutta: Asiatic Society.

Snellgrove, D. L. & T. Skorupski 1977, 1980 *The Cultural Heritage of Ladakh.* 2 vols. Warminster: Aris and Phillips.

Tucci, G. 1932-41 *Indo-Tibetica,* 4 vols. Rome: Reale Academia d'Italia. English translation: Śatapitake Series, Vols. 347-352, 1988-1989, Aditya Prakashan, New Delhi.

Weiner, Sheila L. 1962 From Gupta to Pāla Sculputure. *Artibus Asiae* 25 (2-3): 167-192.

Weyer, H. & J. C. Aschoff 1987 *Tsaparang: Tibets Grosses Geheimnis.* Freiburg: Eulen Verlag.

（担当　森雅秀）

松長有慶著作集 第四巻
マンダラと密教美術

一九九八年四月一八日　初版第一刷発行

著　者　松長有慶
発行者　西村七兵衛
発行所　株式会社法藏館
京都市下京区正面通烏丸東入
郵便番号　六〇〇-八一五三
電話　〇七五-三四三-〇〇三〇(編集)
〇七五-三四三-五六五六(営業)
印刷　中村印刷株式会社　製本　古川製本

© Y. Matsunaga 1998 Printed in Japan
ISBN 4-8318-3341-X C3315
乱丁・落丁本の場合はお取り替え致します